

競馬場の男性学 ——居場所論からの自己の社会学（2）——

大 野 裕 介

目 次

1. はじめに
2. 中央競馬と地方競馬の相違点
3. <居場所>の社会的構成
4. 競馬場と女性たち
5. おわりに

1. はじめに

本稿の主題を簡潔に述べるならば、「居場所としての競馬場」である。競馬場はもちろん、競馬が施行される場所である。そこが<居場所>になるとはどういうことか。そしてそれは誰にとってのものなのか。前者は措くとして後者について答えると、とりわけ「高齢男性にとっての居場所」ということになる。もちろん、前者の問いも重要である。いやむしろ、それこそが要であるといってもよい。「どの競馬場が」という素朴な疑問こそが、本稿の議論におけるポイントになるからだ。しかしこの疑問が素朴であり、かつ深淵であることに気づく社会学者は、数えるほどしかないのではない。

競馬は決してマイナーな競技ではない。藤田菜七子¹⁾ や的場文男²⁾ のようにバラエティ番組で特集が組まれる騎手がおり、東京優駿や凱旋門賞、有馬記念、東京大賞典といった「大レース」は、華々しいCMが製作され、結果がスポーツニュースで詳述される。それはニュースバリューがあるということであり、国民的関心を集める行事である

ということを意味する。それにもかかわらず、競馬という題材に飛びつく社会学者は、驚くほど少ない。

先行研究がないわけではない。たとえば植島啓司（1994）（2008）、山本一生（1995）、谷岡一郎（1996）、立川健治（2008）（2012）、檜垣立哉（2008）（2014）、三好円（2009）、須田鷹雄（2009）といった名を、即座に想起できる³⁾。また、競走馬総合研究所という学会があり、競馬を全方位的に研究する場が整備されていないわけでもない。

そのなかで本稿が目指すのは、競馬論のひとつとして、<場所>としての競馬場を記述することである。通常、競馬場には競馬を観戦するために赴く。しかし、馬券を購入するように定められているわけではない。散歩コースとするもよし——筆者は東京競馬場で「歩行リハビリのために通っている」という女性に会ったことがある——、グルメを満喫するもよし、写生を行うもよし、競馬博物館などの施設を見学するもよし、というように、利用者の行動は制限されていない。しかしそれこそが、<場所>としての自由さであるかもしれない。青木淳（2004）は、以下のように述べている。

建築は、遊園地と原っぱの二種類のジャンルに分類できるのではないかと、思う。あらかじめそこで行われることがわかっている建築（「遊園地」）とそこで行われることでその中身がつくられていく建築（「原っぱ」）の二

種類である。(青木, 2004: 14)

青木は、この分類を「雑」であるという。ということか。たとえばオペラ劇場だ。オペラ劇場では事前に設定されたプログラムが上演され、観劇者の受け取り方も固定化されている。その意味で遊園地である。だが、内実は常に実験的な演出が加えられており、それが観劇者の楽しみのひとつになっている。その意味でオペラ劇場は原っぱでもある。

競馬場がより「自由」なのは、一日12レースというプログラムが設定されており、来客が購入馬券やそれぞれの「物語」に応じて一喜一憂する一方で、プログラムに従うことすら強制されていない点である。しかし、競馬場という建築物にすることは変わらない。その意味で、競馬場もまた、遊園地であり、原っぱでもあるというわけだ。しかし、ここで重要な指摘をしておこう。それは、遊園地も、原っぱも、建築(物)である以前に、そのように用途が便宜的に定められた<場所>であるということだ。

では<場所>とは何か。『空間学事典』では以下のように定義づけられている。

場所の意味は庇護性にある。外界から守られた存在の根拠となるところ、定位の原点、世界への出発点であり中心となる時空間である。住処としての家はその典型である。…(中略) …

場所は単独で背音材しているのではなく、他の場所との関係で構造化されている。(日本建築学会編, 2006: 99)

空間学も建築も本稿の議論と直接関係するものではないが、<場所>がこのように、<存在>の根幹をなす概念であることは疑いえない。なぜか。<場所>に、意味を読み込む主体がいるからだ。たとえば、任意の<場所>は、「東京都」「八王子

市」「東中野」「742-1」というように階層化され、固定されていく。しかしその結果としての「東京都八王子市東中野742-1」だけでは、ただの区別である。それが差異化されるためには、たとえば「中央大学」という値が代入されなければならない。<場所>の意味とはそういうことである。しかし、「東京都八王子市東中野742-1」と「中央大学」を結びつけるものは、実は何もない。「中央大学」でなくてもよいということだ。これを、「<場所>の意味の偶有性」と呼ぶことにしよう。その意味が個人的なものであるとき——名など——、あるいは個人的な意味づけが生じるとき、その<場所>は<居場所>へと変質することになる⁴⁾。

冒頭の議論を想起しつつ論題提起する。競馬場が<居場所>になるということ、それは、競馬場という<場所>に、アイデンティティを包含するほどの強い意味を読み込む主体が存在するということだ。先に述べたように、その主体とは、高齢男性である。ではなぜ、どのように、どの競馬場が、彼らにとってのレゾナントとなるのか？

2. 中央競馬と地方競馬の相違点

本格的な議論に入る前に、なぜ対象が競馬でなければならないのか記述しておく。いわゆる「公営ギャンブル」は、競馬、競艇、競輪、オートレースの4種目がある。そのうち、競艇と競輪とオートレースは、おおむね、競技内で運営や施行者が分かれることはない——弥彦競輪のみ弥彦村が主催——。ところが競馬は、特殊法人であるJRA(日本中央競馬会)が施行する中央競馬と、地方公共団体が施行する地方競馬に分けられる。もちろん競技は同じである。しかし開催場や開催日は異なる。所属騎手も異なる。そもそも騎手免許が異なる。やや複雑だが、本稿の議論において非常に重要であるため、両者の違いを詳述する。

頭出し的に述べておくと、2-1で中央競馬を、そして2-2で地方競馬を概説する。他の公営ギヤ

ンブルにおいては、もちろん一日に数か所で同時に競技が行われることはあるが、他の管轄団体によって同じ競技が行われることはない。競馬が特殊であるのは、また本稿の議論にとって重要であるのは、基本的に平日開催である地方競馬と、基本的に土曜日と日曜日に開催される中央競馬が、同じ競技を施行しているという意味において、比較対照として機能するからである。

2-1. 中央競馬概説

まずは中央競馬について説明する。中央競馬は基本的に土曜日と日曜日に開催される。札幌・函館・福島・新潟・中山・東京・中京・京都・阪神・小倉の10競馬場があり、毎週、2ないし3競馬場で競馬が開催される⁵⁾。ちなみに2017年9月2日と3日は札幌・新潟・小倉の各競馬場で競馬が行われた。

次にレーシングプログラム（進行表）をみてる。各場とも一日12レースが組まれており、第1レースは（場によって異なるが）おおむね10時前後に発走し、第12レースは16時半前後に発走する。東京優駿や有馬記念など特別なレースの開催日にはレース数が前後するが、基本的には12レースである。また、11時半ごろから12時半ごろまで「昼休み」が組まれている——明示されていないが、この時間帯だけ、一時間ほどレース間隔がとられている——ことも特徴である。この12のレースのほとんどは平地競走で、プログラムによっては障害レースが1ないし2レース組み込まれる。1レースあたりの最大出走頭数は18頭（コースによる）で、3頭出走すれば競走が成立する。

さらに説明を続ける。コースは芝とダートの2種類があり、距離によって内回りと外回りに分かれる。これはコース形態に著しい違いがあるためだが、芝コースにおいては、開催が進んで傷んでくる芝の養生のためでもある。また新潟競馬場のように、直線1000mという特殊なコースを持つ

競馬場もある。競馬場によって右回りと左回りが異なるが、それは馬券とは関係するものの本稿の議論とは関係しない。距離について続けて述べると、平地の施行距離は最短600m以上、障害レースは最短2000m以上で行うこととされている。競馬場のサイズによって施行可能距離が異なることを押さえておけば、本稿の議論の「理解」のためには充分である。

もっとも、説明が困難なのは馬券——勝馬投票券——の種類である。しかし本稿の論旨とは有機的なかわりがないため、簡単に式別を羅列するにとどめる。中央競馬では、単勝・複勝・枠連（枠番連勝複式）・馬連（馬番連勝複式）・馬単（馬番連勝単式）・ワイド（拡大馬複）・三連複（三連勝複式）・三連単（三連勝単式）が売られており、競馬場と場外馬券売り場（WINS）、インターネット、電話投票で購入することができる。また日曜日に限り、事前に指定された5つのレースの勝ち馬を当てる「WIN5」がインターネットで売られている。さらに情報として、コンピューターが買い目を自動的に決めてくれる「クイックピック」が競馬場の片隅で売られていることを追記しておこう。

ところで、先に述べた「4場」には、特記事項がある。中山はJR武蔵野線の船橋法典駅から「ナッキーモール」という専用通路が設けられており、直接のアクセスが可能である。東京は京王競馬場線の府中競馬正門前駅から直通の通路が、またJR南武線・武蔵野線の府中本町駅から「フジビューウォーク」という専用通路が設けられており、やはり直接のアクセスが可能である。阪神は阪急今津線仁川駅から「サンライズウォーク」という専用通路が設けられている。京都は直通の専用通路はないが、京阪電車淀駅から徒歩2分という「絶好」のロケーションが確保されている。ちなみにこれは余談になるが、東京競馬場付近には以下の看板が散見される。

写真1 立小便厳禁の看板（東京都府中市本町）



文言から、これは「事後」に建てられたものであると推察される。なお、東京競馬場周辺では、特に競馬開催日において常に警備員や清掃スタッフが巡回していることを添えておく。

以上が「中央競馬概説」である。次節では比較の対象たる「地方競馬概説」を開講する。

2-2-1. 地方競馬概説（1）

地方競馬は、地方競馬全国協会（NAR）によって管轄されている。2017年9月7日現在、帯広・門別・盛岡・水沢・浦和・船橋・川崎・大井・金沢・名古屋・笠松・高知・園田・姫路・佐賀の各場で競馬が開催されている⁶⁾。なおこのうち帯広は、ばん馬がソリを挽く「ばんえい競馬」である。先に説明すると、ばんえい競馬は200mの直線コースを用い、ばん馬が途中でふたつある障害を越えていくというレースである。発売馬券は単勝・複勝・馬連・馬単・ワイド・枠連・枠単（枠番連勝単式）・三連複・三連単のすべてである——枠単は中央競馬にはない——。

他場について説明を加える。門別は「ホッカイ

ドウ競馬」、盛岡と水沢は「岩手競馬」、浦和・船橋・川崎・大井は「南関東4競馬場」、園田と姫路は「そのだけいば・ひめじけいば」というようにグループ化される。そのなかで、たとえば「TCK」（東京シティ競馬・大井競馬場）のように独自の愛称を持つ競馬場もある。

2-2-2. 地方競馬概説（2）

開催日程は場によってまちまちである。強調すべきなのは、中央競馬が土曜日と日曜日しか開催しないのに対し、地方競馬は毎日どこかしの競馬場でレースが行われているということである——中央競馬が開催される土曜日と日曜日、帯広・盛岡・水沢・高知・佐賀は開催される。場合によってその他の場も開催される——。さらに、中央競馬との大きな違いとして述べるべきなのは、帯広・門別・船橋・川崎・大井・高知・園田に関して、ナイター競馬が行われているということである⁷⁾。ナイター競馬とは読んで字のごとく夜間に行われるレースで、たとえば大井競馬場であれば、おおむね、第1レースは15時発走、第12レースが20時50分発走である。

施行距離や施行レース数などは場や日程によって異なり、一定ではないため逐一記す余裕はない。特記事項のみ列举すると、盛岡競馬場には芝コースがあり、ダートと併用されるが、その他の場はすべてダートコースでレースが施行される。

次に、中央競馬と地方競馬の大きな違いをふたつ挙げる。ひとつは予想屋（競馬予想士）の存在、もうひとつは無料送迎バスである。

2-2-3. 地方競馬概説（3）——予想屋——

地方競馬最大の特徴は、予想屋——正式名称は「競馬予想士」であるが、本稿は通称名の「予想屋」を採用する——の存在である。予想屋は公認の存在であり、各人、専用のブースを構えて「仕事」を行っている。予想屋の「仕事」とは何か。それは、予想を「売る」ことである。予想屋は、パドッ

クで馬の状態を見極めると逸早く持ち場に戻り、各馬の状態を解説しつつ、レース展開について述べる。その合間に、レースの買い目が印字された紙片を販売するのである。正確にいうと、客は、予想屋が話している間にブースに近づき、200円——1レース200円、一日通しの予想で1000円——という場合が多い——を置いて紙片を受け取る、という形式に近い。なかには南関東の浦和・川崎・大井を主戦場として活躍する予想屋・高瀬孝也——屋号は「夢迫人」——のように、サイトの開設やTwitCasting（ツイキャス）という手法を通じて、競馬場に来場できないファンに対して場立ちの予想（音声）を生放送で公開する予想屋もいる⁸⁾。

ここで中央競馬および地方競馬のブロードキャスティングについて述べておくと、筆者の住む東京都の場合、大井競馬はTOKYO MXで、また川崎競馬はtvkで生中継される。しかし第1レースから中継されるわけではない。第1レースからの中継を可能にしているのは、地方競馬の場合、インターネット競馬中継であり、中央競馬の場合、グリーンチャンネル（有料）である。また中央競馬に関しては、tvkやテレビ東京、フジテレビにおいて、おおむね14時から16時まで中継される。

2-2-4. 地方競馬概説(4)——無料送迎バス——

筆者のフィールドである南関東に関していうと、浦和・川崎・大井の3場で無料送迎バスが運行されている。船橋は事実上運行されていないが、京成線船橋競馬場駅から、ららぽーとへのシャトルバスに乗ってしまえば——船橋競馬場は、ららぽーとの向かいにある——同じことである。

中央競馬にも最寄り駅から競馬場まで距離があるケースがないわけではなく——特に新潟競馬場——、バスが運行されているが、無料ではない。あくまで路線バスの途中下車である。それに対し地方競馬は最寄り駅から競馬場まで完全無料のピストン輸送が行われている——門別だけは別であ

る——。

ここで論じたいのは、なぜ無料送迎バスが必要なのか、ひいては、中山や東京・阪神のように、最寄り駅から競馬場までの直通の通路がなぜ必要なのかということである。先に中山・東京・阪神（そして京都）について述べておくと、これらが先述したように「4場」と呼ばれ、中央競馬のなかでも集客力が見込まれる競馬場であるということがいえる。また、京都と阪神は比較的最寄り駅から近いが、中山と東京はやや距離があり（東京は府中競馬正門前駅から歩けば数分だが、その他の最寄り駅からは10分前後かかる）、周辺環境への配慮と安全面への考慮から専用通路が設けられていると推察される。事実、新聞を読みながら歩いている競馬ファンが競馬場周辺には多い。まったく指摘されなかったことだが、「歩き競馬新聞問題」は、歩きスマホよりはるか前に存在していたのである。

地方競馬の「名物」ともいえる無料送迎バスは、最寄り駅から競馬場までの専用通路としての役割を果たしているといえなくもないが、実情は、客層が比較的高齢であることと、最寄り駅から競馬場までの距離が比較的事実であること、そして大レースや交流競走の日を除けば中央競馬なみの集客力が見込まれる日が少ないというのが理由ではないだろうか。乗車してみるとわかるが⁹⁾、筆者より10歳年上の須田鷹雄でさえ、このように述べている。

駅に隣接しているような場を除くと、ほとんどの公営競技場では最寄り駅からの無料バスを出している。無料の乗り合いタクシー、「ファンバス」「友の会バス」といった有料バスのケースもあるが、いずれにしても専用の輸送手段があるわけだ、

こういった無料バスを利用しているのは、大半がお年寄りである。私は昭和四十五年生まれだが、自分を除くと二世帯すつとばして

還暦級の人しか乗っていない、ということもあったりする。(須田, 2009: 109-110)

平日の昼間に馬券を買える層は多くいるが、競馬場や他の公営競技場に行ける層は限られている。少なくとも、現役のビジネスマンは難しいだろう。先に、地方競馬場は毎日どこかしらでレースが行われていると述べたが、平日の5日間、完全に開催しているのは、南関東だけである。他場には、中央競馬と重なる形で開催されているところもあるが、議論を平易にするため、地方競馬は平日に開催されると理解されたい。この事実は、本稿の議論を通して考察すると、非常に重大な意味を帯びてくる。

2-2-5. 地方競馬概説 (5)

2-2-3 と 2-2-4 で、予想屋と無料送迎バスという地方競馬特有の存在について挙げた。さらに、平日開催であることを添えた。ここまでをみて、地方競馬場における一日の流れが、ある行為と酷似していることに気づく。

それは、通勤である。朝、電車に乗って競馬場の最寄り駅まで行き、専用バスで競馬場に到着し、10時から16時まで戦い、一杯飲んで帰宅する——。この一連の行為は、ビジネスマンの通勤および退社後の風景と形式的に重なる。

須田が素描したとおり、無料送迎バスの乗客の多くは、高齢男性である。女性はほぼいない。若者はもっと少ない。稀に学生やカップルがいるくらいである。たいていは筆者が最年少である。

場内には、もちろん、競馬目当ての客がほとんどであるが、そしてここからが特筆すべき点であるが、競馬場にいる者は、必ずしも全員が全員、競馬をしているわけではない。エッセイストの青木るえか(2001→2004)は、笠松競馬場について以下のように記している。

笠松はパドックがコースの中にあるので、

パドックを見るためにいちいち席はずさないでいいから、馬券を買いに行く時以外はずっと座ってられる。レースまでの待ち時間がまとまってとれるから読書には最適な競馬場なのだ。読書以外にも、昼寝とかヒマつぶしとか、笠松は時間を有効に使えるいい競馬場である。(青木, 2001→2004: 162)

青木のレポートどおり、競馬場には家族と職場の同僚を連れてピクニック気分で酒盛りをする者、肌を焼く者、ひたすらB級グルメを堪能する者、さまざまな者がいる。競輪場、競艇場、オートレース場でもそれは可能であるが、騒音も少なく、また芝生など設備も完備されている競馬場が、競馬観戦以外の行為にもっとも寛容である。東京競馬場など、京王線東府中駅近くまで移動してしまえば、馬が走る音はほとんど聴こえない。遊具や芝生で遊ぶ子どもの嬌声を聴く機会の方が多くらいである。それもまた<居場所>であるといえよう。

一方で、勤勉に競馬に携わる者は、競馬場にいる間、パドックで馬を診断し、買い目を検討し、馬券を買い、レースを観戦し、払い戻しを確認し、パドックへ……という行動をひたすら繰り返す。中央競馬に「昼休み」があるが、地方競馬にはそのような時間はない。20分から35分くらいの間隔で、えんえんレースが行われ、ただ終わる。これが最大で週に5日間行われる¹⁰⁾のである。皆勤であれば、もはや余暇というより勤労に近いイメージで捉えるのが近いのではないか。

しかし誤解を避けるために述べるが、本稿はもちろん、地方競馬への参戦が通勤・勤労とイコールであると述べたいわけではない。あくまでもそうなぞらえることができるという指摘である。だがそう見なすことで、高齢男性の<居場所>に関する考察に光明が差す。なぜ、地方競馬(場)が高齢男性の<居場所>になるのか。この問いは戦後の日本男性の<居場所>のあり方と深く関係

する。

3. <居場所>の社会的構成

2章では、中央競馬と地方競馬の比較を通じて、平日開催の地方競馬に「勤労」の萌芽をみた。ここでふりかえっておくと、<居場所>とは、<場所>に対して、何らかの個人的な意味づけが加えられることによる変質の結果として現れるものであった。ここから敷衍すると、以下のような仮説を立てることができる。高齢男性は、地方競馬(場)に対し、「通勤・勤労」という意味を付与することで、自らの<居場所>としている、と。

以下ではこの仮説を理論的に補強する。具体的には、男性学、ジェンダー論、日本社会論の知見を援用することとなる。

3-1. 誰の<居場所>がないのか

「居場所がない」とこぼす人がいる。職場という<場所>があり、自分の席があるにもかかわらず<居場所>がない。仕事上のトラブル、業績不振、職場の人間関係、体調不良など個人によって原因はさまざまであるだろう。いずれにせよ、仕事を通じての自己実現が難しくモチベーションの継続が厳しいということだ。仕事に限った話ではない。職を持たない人、持てない人にもその「問題」は等しく該当する。自分がその<場所>で生きるうえで不快な負荷を背負っていること、それが「居場所がない」ということだ¹¹⁾。

社会的な問題として括るならば、<居場所>がないという「問題」は、「生きづらさ」の「問題」として捉えることができる。しかし、まったく悩みや心配事を抱えずに生きている人は、少ないのではない。誰もが、大なり小なり負荷を抱えて生きているのではない。そうでなければ、「生きづらさ」という「問題」は、「国民病」として大々的に扱われているはずである。そうでないのはなぜか。多くの人が、「生きづらさ」という「問題」を抱えながら、折り合いをつけて生きているから

である。どのように？ 社会学的自己論は「多元的自己」という「答え」を与える。

議論は難しい。たとえば筆者は、息子であり、大学講師であり、彼氏であり、ギタリストであり、社会美学者であり、馬券師である。それぞれの<場所>で、それぞれの「大野裕介」に付随する役割を果たしている。「多元的自己」をごく簡単に説明してしまえば、そのようになる。筆者はこれらのなかで、競馬場——それも大井競馬場——にいるときがもっとも「自分らしさ」を感じる。つまり筆者にとっても、競馬場は<居場所>として機能している。たとえば馬券が大きく外れて多大な負荷がのしかかってきても、である。

多元的自己についてもう少し説明を加える。もちろん、どこに<居場所>を見出すかは個人の自由である。サークル、趣味、家庭…そして仕事(会社)という場合も当然あるだろう。ダブルワーク、トリプルワークが「あたりまえ」の層には、多元的自己の概念は説得力をもって迎えられるのではない。あるいはSNS疲れを訴える人々にも。

だがここで、多元的自己の射程圏を外しかねない存在の可能性を指摘せざるをえない。それは、戦後の日本の経済成長を支えた世代、いわゆる団塊世代である。団塊世代がなぜ、多元的自己の概念から外れてしまうのか。それは、団塊世代の志向性が、基本的に、勤労のみに向いている/いたことにある。

3-2. 団塊世代の労働軸アイデンティティ

戦後すぐの日本は復員者と就職希望者が入り交じり、労働力が過剰な状態にあった。しかし国や法制上の斡旋により、就職希望者は職に就くことができた。高度成長期に入ると、各家庭の経済状況が好転し、軒並み進学率が上昇した。経済成長の折、雇用者側は労働力を必要としていた。したがって、就職希望者があふれることはなかった。そのなかで確立されたのが、年功序列制度と終身雇用制度である。

これらの制度が機能したのは、当時主力だった世代が若かったからである。次第に賃金が上がっていく彼ら彼女らに対し、それでも雇用側が困らなかったのは、まさしく高度経済成長によるものである。成果にかかわらず賃金が上昇するという仕組みは、労働者のモチベーションの維持には非常に効果的であると思われる。重要なのは、就業しているということ、この一点のみである。そして彼ら彼女らの僥倖は、労働の成果と景気の上昇が一致するということにあった。働くことそのものがモチベーションになりえた世代、それが戦後の高度経済成長期を支えた団塊世代なのである¹²⁾。

その後の状況、つまりバブル崩壊後については論を俟たない。年功序列制度も終身雇用制度も事実上崩壊し、就職難の時代を迎え、大企業はいとも簡単に倒産し、経済は深刻な打撃を被りつづけている。団塊世代の多くは引退し、年金で生活する者もいれば、年金だけでは生活できず再就職、再々就職を果たす者もいる。21世紀に高齢者の貧困が「社会問題」になると、誰が予想しえただろうか。年金制度の問題点や年金に関連する日本の経済状況の問題、高齢者の労働に関する問題は真剣に議論されるべきである。しかし、本稿にはそれほど紙幅は許されていない。それよりも本稿が重要視したいのは、団塊世代が、労働そのものをモチベーションに、そして労働者であることをアイデンティティとすることで、何を得、何を失ったのかということである。

3-3. <居場所>を自宅外に求める男性たち

大雑把に述べてしまえば、彼らが得たものは、賃金および会社内・家庭内での序列であり、失ったものは、プライベートを充実させる余裕と、家庭内での<居場所>である。「亭主元気で留守がいい」という有名なフレーズが、何よりもそれを雄弁に物語っている。田中俊之（2009）は以下のように指摘する。

男性は必ずしも会社のために働いているわけではない。しかし、家族を養うためにはフルタイム労働に従事せざるをえないし、その結果、家族よりもはるかに長い時間を会社で同僚と過ごすことになる。（田中、2009：78-79）

あらためて問題提起しよう。職務に就いている間は会社が彼らの<居場所>になるが、定年退職後はどうなるのか。自宅にいたところで、それまで自宅に長時間いなかったのだから、どこに何があるのかわからない。家事を手伝おうにも、基本的な能力が身につけていない。料理教室や趣味の集まりに通う高齢男性もいるが、それはあくまでも最近の話である。重要なことを指摘する。高齢男性は、自宅外に<居場所>を求めている。それがなぜなのかは検討に値する問いである。先に少し述べたが、彼らは、労働者としてのアイデンティティを確立し、勤務先を<居場所>とすることを余儀なくされたために、自宅を<居場所>とする機会を奪われつづけ、結果として、自宅外を<居場所>とすることに抵抗がなくなったのではない。一方で、彼らを支えつづけた女性たちの<居場所>はまさに自宅であり、生活を中心とすることとつくられる縁を中心に、彼女らは自らをアイデンティファイしつづけたのではない。

以上の仮説の理論的根拠を、上野千鶴子による「女縁」概念、伊藤公雄・田中俊之による男性学、斎藤環による「所有」と「関係」にもとづくジェンダー論、水無田気流（2015）による日本社会論に求め、次節より展開する。

3-4. 「女縁」と、<居場所>を自宅外に求める男性たち（2）

高度経済成長期を支えてきた世代——団塊世代、ポスト団塊世代——は、労働そのものがモチベーションになりえたと記した。本稿の論旨にそ

くしていうと、それはつまり、勤務先が＜居場所＞として機能したということである。この指摘が重要なのは、この世代の男性においては、自宅や家庭が＜居場所＞として十全に機能していなかった可能性があるということである。その機会を長期間にわたって奪われつづけてきたと述べてもよいだろう。他方、自宅や家庭が＜居場所＞だったのは、長期間にわたって子育てを担ってきた人々——主に女性——、企業戦士という立場を選ばなかった人々、退職などによって＜居場所＞が変わった人々であるが、ここでは女性、特に専業主婦に焦点をしばって議論を続けよう。

勤め人を夫に持つ専業主婦の間には、生活を営むなかでさまざまなネットワークが生成される。地域の集まり、子どもの学校を通じた集まり——PTA など——、趣味の集まり、といったものである。上野千鶴子（→2008）は、女性たちが独自に結び、続けてきたこのような縁を、「女縁」と呼んだ。この「女縁」に代表されるような人間関係の生成が、勤務先という＜居場所＞をなくし、新たな＜居場所＞を求める男性たちに大きなヒントを与える。

男性学の大家である伊藤公雄（1996）は、団塊世代がこのような状態——退職後に＜居場所＞がなくなる状態——に陥るのを早くから見抜き、注意喚起してきたひとりである。引用する。

定年後の男たちの仕事が無くなった生活には、さまざまな苦難が待ち受けている。

それまで「仕事人間」として頑張ってきた男性たちの生活スタイルは、定年後の男たちの生活に大きな変化をもたらす。なにしろ自分のアイデンティティを支えていた「仕事」「肩書」「名刺」がなくなるのだから。その精神的ショックは大きい。…（中略）…

会社はなくなっても、家庭に自分の居場所があるわけでもない。仕事第一で、家庭でのコミュニケーションもろくにしないままに、

「妻は黙っていてもわかってくれているはずだ」と思い込み、家事や育児は妻にまかせっきりでやってきた男性たちだ。テレビのスポーツ観戦と接待ゴルフ以外の趣味もなく、仕事以外の友だち関係もほとんどない。PTA 活動や自治会活動などの地域活動は妻まかせ、そのため地域に知り合いもほとんどいない。こうした男性たちが老後を迎えたとき、待っているのは、「濡れ落ち葉」の人生だ。（伊藤、1996：65-66）

このような男性たちがどこに＜居場所＞を求めるか。退職者だけではない。失業した男性たちにも同様の問題が待ち構えている。田中俊之（2009）は指摘する。

定年を迎える前にリストラなどによって失業してしまった男性にとって、家庭や地域での居場所探しはより深刻な「問題」となる。（田中、2009：79）

ここで非常に重要な「現象」を示唆的に描写しておく。それは、「（失業した男性が）スーツを着て出社するふりをする」というものである。そこには、労働——特に会社勤めに対する——に体现される男性性という規範の内面化が顕在化しているが¹³⁾、もうひとつ指摘しておこう。それは、＜居場所＞は自宅の外にあるという男性性の規範の内面化でもあるということだ。

それをふまえれば、職場はすでになく、家庭や地域にも＜居場所＞がなく、特にこれといった趣味もない男性たちにとっての憩いの場所、つまり＜居場所＞が、図書館などの公共施設やパチンコなどの遊戯施設、あるいは早い時間から開催している公営ギャンブル場になることは、容易に想像できるのではないか。特に競馬場は、入場料——100 円から 200 円——を払ってしまえば、閉門まで広い敷地内で思いのままに過ごすことができ

る。馬券の発売単位が100円なので、馬券を1枚買っても最悪200円の「損失」ですむ。運がよければプラス決算で一日が終わる。競輪、競艇、オートレースと違い、競馬場に関しては競技中の騒音がほとんどない。敷地の外れまで行ってしまえば物音すらない。競馬をしない自由すら保証されている点に、競馬場の寛容さがある¹⁴⁾。

近年、病院の待合室やゲームセンターが高齢者のサロン化していることが「問題」とされている。本稿はそのことの是非を問うものではない。むしろ「そうになってしまうのをええない」点を問うものだが、それ以上に、＜居場所＞のなさという「問題」が、われわれにとって非常に大きなものとされていることの証左として挙げておきたい。

3-5. ＜居場所＞と時間の「問題」

水無田気流（2015）がここまでの議論を補強する。水無田は、高度経済成長以降にできあがった日本社会の構造、具体的には性別分業の規範が、いま、男性と女性が抱えている「問題」の根にあると指摘する——ただ、「決して普遍的なものではない。右肩上がり経済成長と、相対的に安定した一時代に最適化し成立したものである。それゆえ、性別分業はこれらの結果であり、原因ではないことに留意すべきである」（前掲書：232）と述べ、単純に原因化することには注意を喚起している——。それはどのような「問題」なのか。

まず男性についていうと、日本社会において、男性は就労第一主義に支配される。水無田は「いったん就労の場からこぼれ落ちると、一気に社会とのつながりをなくし孤立してしまう」（水無田、2015：119）と指摘する。あるいはずっと就労していても、本稿が指摘してきたように、その期間は必ず終わりを迎える。

貴兄が現役のサラリーマンであるならば、おそらく日々忙しく仕事をこなし、孤立など思いもよらないかもしれない。でも、その職

業生活はかならず終わりが来る。そのとき、貴兄は居住地域に居場所はあるだろうか。仕事関係を抜きにした、純粋な趣味友だちはいらるだろうか。…（中略）…この国の男性は、「現役」で仕事をしていればすべて上手く回っていくとされるが、裏返せば、仕事を失うとすべてを失うリスクが極めて高い。（前掲書：133-134）

水無田はこのように問いを投げかけ、男性が抱える「問題」を「関係貧困」と定位した。一方、女性が抱える「問題」はどのようなものか。直裁にいうと、それは「時間のなさ」である。日本社会における就労第一主義の傍らで、女性たちは自らの持つ時間を家事や育児、地域とのかかわりや子どもの学校行事などに「取られ」、睡眠時間すら満足に得られないまま日々を過ごしてきた。この像が一般的であることは、典型的なサラリーマン家庭であった筆者の例をみても、まったく想像に難くない。水無田は女性の抱える「問題」を「時間貧困」と定位している。

本稿は労働論ではないので、水無田が展開する議論には詳細に立ち入らないが、同じ問題意識を抱えていると考える。補足するならば、「時間貧困」は、男性の「問題」でもあるということがいえるだろうか。それというのも、男性は男性で、就労している場合、仕事というものに時間を「取られ」ているということがいえ、プライベートとして確保できる時間はごく限られているからだ。数少ないその時間——多くは週末——を、ゴロ寝や自宅でのんびり過ごすことに費やすという態度を、「家族サービスに協力的でない」と批判することはたやすい。しかし男性たちもまた、自らの持つ時間を、職務に「取られ」ているのだ。だがこのように考えると、一日のなかでもっとも長くいる空間が＜居場所＞であるともいえ、＜居場所＞にいながら他の＜居場所＞も求めるという姿は、多元的自己の体现であるといえる。その裡にある＜居場

所>の複数性という事態にも注目すべきだろう。また、性別分業という規範を背景に持つ日本における労働環境の構造と、それを内面化した、特に男性の、規範的な男性性とのかわり——受容あるいは抵抗——においては、<居場所>の複数性というより単一性が「問題」となりやすく、そうであるためにそれが喪失したときに<居場所>のなさとして前景化しやすいということがいえるだろう。ゆえに、(主に平日開催の)地方競馬(場)は、(高齢)男性にとって、職場への通勤・勤務の代替として、つまり<居場所>として位置づけられるのではないか。さらにいえば、「規範」であるがゆえに、通勤・勤務に代表される典型的なビジネスマンという形をとらなかった男性たちにとっても同様に位置づけられうるのではないか。先に行っておいた中央競馬の比較の意義がここにあるが、もちろん、競馬場は万人に開放されている。そうであるならば、女性にとっての競馬場とはどのような場所>であるのか、あるいは逆に、競馬場側が、女性をどのように扱っているかという「問題」についてもふれておくべきだろう。その「問題」について、次章で取り扱うこととする。

4. 競馬場と女性たち

本章では、男性と競馬場との関係の対比として、女性と競馬場の関係について述べたい。特に地方競馬においては、概観してきたとおり、<居場所>の「問題」も含めて、男性性が色濃い。そのような場所>であるからこそ、女性客は、誘致する必要がある。そこで本章では、中央競馬による女性客誘致の取り組みを概観する。そこでみられる女性性をもとにした<居場所>の中心となるのは、やはり、関係性志向である。

4-1. 誰が競馬場に来るのか

競馬場には競馬ファンのみが来場する。かつてはその「前提」が通用した。いまでも通用しないではないが、近年では中央競馬も地方競馬も競馬

ファン以外をも対象にしたファンサービスに余念がない。特に中央競馬に関していうと、競馬ブーム以降、ブランドCMが毎年数種類制作されており、それに見合ったキャッチコピーが制定されている。木村拓哉を起用した「走れ、JRA」や、織田裕二を起用した「FEEL LIVE」などが主に周知されている。ここで年間キャッチコピーとCMの出演者を示しておこう——本稿ではJRAがキャッチコピーを制定しだした1988年以降について示す。実際は1954年の「明るく楽しい中央競馬」までさかのぼることができる——。

キャッチコピーに明確な変化が現れるのは、2008年である。この年、中央競馬が提案したキャッチコピーは、「CLUB KEIBA」である。CMにおいても、佐藤浩市・大泉洋・小池徹平・蒼井優を起用し、賭けの「孤独な戦い」という従来のイメージと一線を画した戦略に打って出た。中央競馬が女性客の獲得に積極的に乗り出したのもこのころからである。いくつか例示すると、初心者セミナーの開設や競馬場内外の「UMAJO SPOT」¹⁵⁾の開設、小冊子『ことりっぶ はじめての東京競馬場』(2015)の配布といった「戦略」を次々と打ち出している。また2012年の企画「SMART! JRA」にともない結成された「AKB競馬部」とのコラボレーション企画も耳目を集めた。さらに、女性と競馬とメディアとの関連で、2016年3月に中央競馬所属では16年ぶりの女性騎手¹⁶⁾としてデビューした、藤田菜七子についてもふれておく必要があるだろう。日本中央競馬会所属でありながら、所属厩舎の調教師である根本康広の「粋な計らい」により、3月3日の川崎競馬でデビューした彼女のもとには、取材陣が殺到した。普段まったく競馬に関心を示さないワイドショーや夕方のニュース番組もこぞって採りあげた。彼女のデビューとそれからがどのような枠組みで語られたのか、という論題は別稿に譲られるべき重要な問いだが、とりあえずここで注目しておきたいのは、現在のビジネスモデルにおいて、

表1 中央競馬年間キャッチコピーとCM出演者

年代	年間キャッチコピー	出演者
1988-89	そういう、競馬が大好きです。	小林薫
1990-91	好奇心100%の競馬です。	柳葉敏郎・賀来千香子
1992-93	あなたと話したい競馬があります。	高倉健
1994-95	あなたがいるから、競馬は楽しい。	真田広之・時任三郎・中井貴一
1996-97	ひとりひとりに、競馬はうれしい。	本木雅弘・鶴田真由
1998	キミの夢はここにある。	木村拓哉
1999	走れ、JRA	木村拓哉
2000	私を楽しむ（それが競馬）。	緒形拳・松嶋菜々子
2001	競馬が、キミを呼んでいる。	なし
2002	GOOD LUCK!	小林薫・永瀬正敏・妻夫木聡
2003	サプライズ!	明石家さんま
2004	サプライズ!!そして、次の名場面へ。	明石家さんま
2005	大人をでっかく楽しむ時～BIG TIME	中居正広
2006	BIG TIME～競馬でうれしいのが、いちばんうれしい。～	中居正広
2007	FEEL LIVE	織田裕二
2008-2010	CLUB KEIBA	佐藤浩市・大泉洋・小池徹平・蒼井優
2011	CLUB KEIBA	桐谷健太・吉高由里子・佐藤健
2012	近代競馬 150th ANNIVERSARY	なし
2013	なし	なし
2014	LOVE, HOLIDAY.	なし
2015-2016	あなたの競馬が走り出す。	笑福亭鶴瓶・有村架純・瑛太
2017	HOT HOLIDAYS!	高畑充希・土屋太鳳・松坂桃李・柳楽優弥

出所：筆者作成。

いかに女性を取り込むことが重要な案件となっているか、その前提として関係性志向への着目があるのではないか、ということである。

挿話を挟むと、筆者の場合、東京競馬場に単独参戦して、パドックと自動券売機と本馬場という3か所の往復で終わることが多い。馬券が当たって西海ラーメンや生ビールを調達しに行くことはあるが、行ってもそれくらいである。場内で行われるイベントには行ったことがない。しかし、友人であり筆者を競馬の道に引きずりこんだC氏（女性）と行くと、各国のビール展に行ったり競馬博物館に行ったり、競馬以外のところで競馬場ライフを楽しんでいる。ビジネスの対象として考えた場合、この差——女性の存在——は、あまりにも大きいのではないかな。

本稿の問いをここで再掲しておこう。それは、

「なぜ」地方競馬（場）に高齢男性が集まるのか、というよりも、「どのように」地方競馬（場）に高齢男性が集まるのか、というものだった。つまり、その現状がいかにして成り立っているか、を問うものである。そしてそのキーワードが＜居場所＞である。戦後の高度経済成長期を支えた彼らは、労働第一主義という男性性にもとづく規範が内面化されていたために、職場を＜居場所＞とせざるをえず、家庭をも＜居場所＞と感じられるほどの余裕を、社会的に与えられてこなかった。勤務することを生きがいと感じさせるようなシステムが、用意されてきたのである。一方、多くの女性たちには、「社会進出」や「積極的な登用」というフレーズがいまなお頻繁に用いられるように、第一線で働くという＜居場所＞を用意されなかった。男性のほとんどは会社に、女性のほとん

どは家庭に、極端に言えば、いるしかなかったのである。ただ女性たちには、家事や育児、地域や趣味のサークルなどとかかわることによって、縁をつくる機会があった¹⁷⁾。そのいずれの＜居場所＞の構成のされ方にも、男性性を中心とした労働環境の構造が深くかかわっていたのである。

4-2. 競馬場に行く男性、競馬場に来る女性

ところで、本稿の主題は、地方競馬（場）にみる男性性とも換言できる。それと対比するように、中央競馬ではいま、女性性を中心とした集客戦略が練られている。

競馬が単なる興行ではなくビジネスでもあるのはいわずもがなである。収入の多くをファンの馬券購入に頼っているのも、指摘するまでもない。そうであるならば、ひとりでも多くのファンに、100円でも多く馬券を購入してもらいたい、そのためにどうすればよいのか、と施行者側が考えるのは「当然」のことである。そこで白羽の矢が立ったのが、関係性志向を持つ女性客の獲得である。確かに、フィールドワークをしていると、単独で来場している女性客は少ないように思われる。これは筆者の推測だが、女性は、おおむね友人や恋人、あるいは家族で来場している。つまり、誰かという。

ところで競馬場には、騎手名鑑や競馬場案内などとともに、競馬初心者用にパドックでの馬の見方や馬券の種類、買い方などをレクチャーした小冊子が置かれている。先に述べた『ことりっぶ はじめての東京競馬場』も趣旨は同じだが、『ことりっぶ はじめての東京競馬場』は、東京競馬場内のグルメ情報などに加え、最寄り駅のひとつである府中駅周辺のスイーツスポットも紹介されている点が特徴的である。つまり、競馬場に行って一喜一憂して終わり、ではなく、一日のなかに競馬観戦が位置づけられているのだ。さらにいうと、競馬場を他の＜場所＞と関係づけて捉えるという、関係性志向の視点で編まれていることも指

摘できる。言質をとる目的ではないが、以下のような記述もある。

競馬場は馬券を買う人だけが来るところではありません。

楽しいイベントもあって、女性同士でも安心して一日過ごせます。(p. 6)

つまり、女性ひとりでの来場というケースが、あらかじめ想定されていないのである。また、「女性同士でも安心して」という文言に、男性性への意識をみることもできるだろう。

女性が関係性志向を持つ、という理論的根拠は、斎藤環（2009）に求められる。本稿はジェンダー論ではないので軽くふれるにとどめるが、斎藤は、ジェンダーの存在を認め、その枠組みがどのように現実的に作用するかを注意深く観察するジェンダー・センシティブと呼ばれる立場をとる。そしてその立場と彼の専門とする精神分析の親和性の高さをもとに、男女の欲望の持ち方の違いを、「所有」を志向するか「関係」を志向するかという違いに分けて論じている。もちろん、ジェンダーは単純な二項対立で「理解」されるわけではない——性別そのものがふたつであるとも限らない——し、斎藤自身も「所有原理を主張する女性がいてもいいし、関係原理にこだわる男性がいてもいい」（前掲書：246-247）と柔軟な姿勢をとっているが、地方競馬と中央競馬の客層および集客姿勢のあり方の差異を考えるうえで、説得性の高い理論であることは確かである。

先に、団塊世代の男性について、男性性にもとづく労働規範に乗ることで、勤務先という＜居場所＞を得る代わりに、自宅という＜居場所＞を得られなかったと述べた。またそれにより、彼らが＜居場所＞を自宅外に求める心性を持っていることを指摘した。その精神性はまさに自宅を所有する、家族を所有する、という形で顕在化するものであり、関係性の重視から生じるものではないよ

うに思われる。しかし彼らとて関係性をまったく無視しているわけではない。近年、その強制性が「問題化」されてはいるが、勤務後の飲み会を中心としたコミュニケーションや、つい競馬場で見知らぬ人に話しかけてしまうといった心性が、彼らなりの、関係性をもとにしたアイデンティファイなのではないか。中央競馬が、「CLUB KEIBA」以降、明確に女性客誘致を目論んでいることはすでに述べた。そこに女性特有の関係性志向への着目からんでいることは間違いないだろう。重要なのは、競馬の、資金を元手に、走るかどうか未知である競走馬を持ち、賞金を元手にさらに競走馬を持ち…という、資本主義と所有志向の権化ともいえる競馬社会に、女性的な関係性志向という新たな軸を持ち込み、女性にとっての〈居場所〉化を促す企図と、もともと所有志向を持ち、〈居場所〉を自宅外に求めるという志向性を持つ男性にとっての〈居場所〉化が、奇遇にも合致したということである。逆に地方競馬(場)は、ファンサービスこそ盛んではあるが、これほどまでに女性客の誘致を前面に押し出した企画はみられない。

最大で週5日間開催の地方競馬と週末開催の中央競馬との差異を、「所有」志向と「関係性」志向というジェンダーによる〈居場所〉との関連にもとづいて論じた点に本稿の意義があるが、それ以上に、地方競馬(場)がいかにして高齢男性の〈居場所〉となっているかを、彼らの持つ男性性を内面化した労働規範——「働き方改革」などで多様性が認められてはきているがいまだに支配的であると思われる——を参照し、通勤・勤務というルーティーンの再現によるものである——「規範」であるがゆえに、通勤・勤務をしなかった男性にも影響を及ぼしている——と指摘した点に、最大の意義がある。

5. おわりに

本稿は、地方競馬(場)がいかにして高齢男性の〈居場所〉となっているかを論じた。その対象は主に現役を引退した層であり、彼らが現役時代に植えつけられた、男性性を基本とした労働規範による「通勤・勤務による職場の〈居場所〉化」を、平日開催の地方競馬(場)が代替していると「理解」することができた。しかしそのことは、男性の、特に高齢男性の〈居場所〉をめぐる問題の一部の仕組みを解き明かしたただけであり、労働環境における男性性の支配性という「問題」からは抜け出せていない。主題化される男性の〈居場所〉に、いやがおうにもつきまとう労働(のあり方)こそを、われわれは問うべきなのかもしれない。

謝辞 本文中に登場する「C氏」こと千葉亜由美さんには、初稿(本稿は第2稿)の段階から原稿をお読みいただき、多くの有益なアドバイスをいただきました。また中央大学研究所合同事務室資料課長の児玉純一氏、恩師である副島昭夫氏の折からのご助言やご厚情にも深く感謝し、ここに記させていただきます。

- 1) 2016年に中央競馬では16年ぶりの女性騎手としてデビューし、スポーツ紙のみならずメディアの注目を集めた。
- 2) 1956年生まれ。1973年に大井競馬でデビューし、以来、二度の全国リーディングに輝くなど、2017年現在も第一線で活躍する、地方競馬を代表する騎手である。2017年9月11日現在で通算7056勝を数え、佐々木竹見の持つ地方通算勝利記録7151勝をまもなく抜かんとしている。
- 3) とりわけ檜垣は、競馬場をフィールドとするという点で筆者と姿勢をともにしている。また「賭博」に対して〈自己のテクノロジー〉や〈偶然性〉という概念装置から迫り、論考を続けている点においても、筆者と近い立場にいる数少ないアカデミシャンである。

- 4) 大野裕介 (2014) で、場所論について検討している。また本稿は<場所>と<居場所>の関係をさぐる論考という意味で、前掲書と連関する。
- 5) 東京・中山・京都・阪神は「4場」と呼ばれ、10場のなかでも中心的に扱われる。
- 6) この10年の間に、旭川・福山・荒尾の3場が廃止の憂き目に遭った。
- 7) 時期によってはデイ競馬になる。
- 8) 予想屋はもちろんひとりではない。たとえば南関東では協同組合ホースレースリサーチ東京に所属する予想屋のみが、予想を場立ちで売ることを許されている。彼らの予想はネットでも購入することができる。
- 9) 本稿と非常に関心が近い論文に、常滑競艇場をフィールドとしてエスノグラフィーをものした寄藤晶子 (2005) などがある。寄藤は「ファン調査」を参照し、公営競技の愛好者には男性が多く、競艇も全24場平均で女性は1割にとどまっていること、それは常滑競艇場も同様であり、来場者の6割が50代以上の無職を多く含む男性で占められていることを指摘している (寄藤, 2005: 14)。ただし平成7, 8年度のデータであることには注意が必要である。
- 10) 南関東は稀に週に6日行われることもある。
- 11) 本稿は高齢男性を議論の対象としているが、いま、居場所論の対象は若者や社会的弱者など多岐にわたっている。社会学的な居場所論の重要な先行研究として阿部真大 (2011)。
- 12) 一方で、80年代以降、「働きすぎ」による過労死が社会問題化したことも指摘しておく。
- 13) ここでいう「男性性」規範に、就労・結婚という属性が備わっていることは、思いのほか重要である。
- 14) 夏場には敷物とクーラーボックスを持ち込んでパーティーをする猛者が現れるが、度を超すと係員が注意しにくる。
- 15) 公式HPによると, UMAJO とは「これまでの“競馬”にとどまらず, 女性ならではの感覚を活かして, もっと自由に, ぐっとポップに, ケイバを楽しむ女性たちのこと」とのことである。UMAJO SPOT はドリンクが無料でサービスされ, 女性のUMAJO コンシェルジュも常駐している。オリジナルスイーツの販売やファッションショーなども開催されてい

る。

- 16) 地方競馬には、2017年9月12日現在、竹ヶ原 茉耶 (ばんえい)、鈴木麻優 (岩手)、木之前葵 (名古屋)、宮下瞳 (名古屋)、下村瑠衣 (高知)、別府 真衣 (高知)、岩永千明 (佐賀) がいる。
- 17) 伊藤公雄は「男性ネットワークづくり」を提唱しているが (伊藤, 1996: 330)、女性においては、わざわざネットワークをつくろうとせずとも自然に形成されるものであると思われる。

参考ホームページなど

- 日本中央競馬会 (JRA) <http://www.jra.go.jp/> (2017年9月12日最終閲覧)
- 地方競馬全国協会 (NAR) <http://www.keiba.go.jp/nar/index.html> (2017年9月12日最終閲覧)
- 南関東競馬公認予報士 夢道人 <https://yumeoi-horse/> (2017年9月12日最終閲覧)
- <http://twitcasting.tv/yumeoibitonol> (2017年9月12日最終閲覧)
- 南関東公認競馬予想士ホースレースリサーチ東京 <https://hrt.or.jp/> (2017年9月12日最終閲覧)
- UMAJO <http://umajo.jra.jp/> (2017年9月12日最終閲覧)

参考文献

- 阿部真大, (2011), 『居場所の社会学—生きづらさを超えて』, 日本経済新聞出版社.
- 檜垣立哉, (2008), 『賭博／偶然の哲学』河出書房新社.
- , (2014), 『哲学者、競馬場へ行く—一賭博哲学の挑戦』青土社.
- 三好円, (2009), 『バクチと自治体』, 集英社.
- 大野裕介, (2014), 「名—居場所論からの自己の社会学」『紀要 社会学・社会情報学第24号』, 中央大学文学部編, pp101-114.
- 立川健治, (2008), 『文明開化に馬券は舞う—日本競馬の誕生』世織書房.
- , (2012), 『地方競馬の戦後史—始まりは闇・富山を中心に』世織書房.
- 谷岡一郎, (1996), 『ギャンブルフィーヴァー—依存症と合法化論争』中央公論社.
- 植島啓司, (1994), 『競馬の快楽』講談社.
- , (2008), 『賭ける魂』講談社.
- 山本一生, (1995), 『競馬学への招待』筑摩書房.

引用資料

日本中央競馬会, (2015), 『ことりっぷ はじめての東京競馬場』, 昭文社.

引用文献

青木淳, (2004), 『原っぱと遊園地—建築にとってその場の質とは何か』, 王国社.
 青木るえか, (2001 → 2004), 『私はハロン棒になりたい』 → 『主婦の旅ぐらし』, 本の雑誌社 → 角川書店.
 伊藤公雄, (1996) 『男性学入門』, 作品社.
 水無田気流, (2015), 『「居場所」のない男, 「時間」がない女』, 日本経済新聞出版社.

日本建築学会編, (2006), 『建築・都市計画のための空間学事典改訂版』, 井上書院.

斎藤環, (2009) 『関係する女 所有する男』, 講談社.
 須田鷹雄, (2009) 『いい日, 旅打ち。—公営ギャンブル行脚の文化史』, 中央公論新社.

田中俊之, (2009) 『男性学の新展開』, 青弓社.

上野千鶴子, (2008) 『「女縁」を生きた女たち』, 岩波書店.

寄藤晶子, (2005), 「愛知県常滑市における「ギャンブル空間」の形成」『人文地理』(57-2), pp.5-26.